

令和3年度地方税制改正（税負担軽減措置等）要望事項

（ 新設 ・ 拡充 ・ 延長 ・ その他 ）

No	13	府省庁名	内閣府
対象税目	個人住民税 <u>法人住民税</u> 事業税 不動産取得税 固定資産税 事業所税 その他（ ）		
要望項目名	試験研究を行った場合の法人税額の特別控除の拡充及び延長並びに中小企業者等の試験研究費に係る特例措置の延長		
要望内容 (概要)	<p>我が国の国際競争力を支える民間研究開発の維持・拡大を図るため、イノベーションに繋がる中長期・革新的な民間研究開発投資を促す仕組みとする。</p> <p>具体的には、世界の産業構造が新型コロナウイルス感染症の影響もあり急速に変化しつつある中、企業が研究開発投資を増加させるインセンティブの更なる向上を図るため、総額型の控除上限引上げ等を行うとともに、経済のデジタル化等に伴う研究開発手法の変化に合わせた制度の見直しを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○総額型及び中小企業技術基盤強化税制の控除上限引上げ ○クラウドサービスや製品開発のために用いられるツール等、自社利用ソフトウェアに係る試験研究費について、発生時損金処理と研究開発税制の税額控除対象試験研究費への算入 ○自社を実験場とした研究開発行為に係る規定の明確化（国税庁 Q&A における「事務効率・経営組織の改善に係る費用」の明確化） ○オープンイノベーション型の見直し（手続合理化等） ○総額型の控除率の上乗措置の適用期限の延長（2年間延長（令和4年度末まで）） ○試験研究費の額が平均売上金額の10%超の場合の上乗措置の適用期限の延長（2年間延長（令和4年度末まで）） ○中小企業者等について、試験研究費が8%超増加した場合の上乗措置の適用期限を延長（2年間延長（令和4年度末まで））等 		
関係条文	<p>地方税法第23条第1項第4号、同法第292条第1項4号、同法附則第8条</p>		
減収見込額	[初年度] ▲92 (▲1,483)	[平年度] ▲111 (▲1,531)	(単位：百万円)
	[改正増減収額] —		

<p>要望理由</p>	<p>(1) 政策目的 我が国の研究開発投資総額（平成 30 年度：19.5 兆円）の約 7 割（同：14.2 兆円）を占める民間企業の研究開発投資を維持・拡大することにより、イノベーション創出に繋がる中長期・革新的な研究開発等を促し、我が国の成長力・国際競争力を強化する。あわせて、自律的なイノベーションエコシステムを構築する。</p> <p>(2) 施策の必要性 我が国の民間企業は、国全体の研究開発投資総額の約 7 割を担っており、イノベーション創出にあたって中核的な機能を果たしている。我が国の経済成長力、国際競争力の維持・強化を図っていくためには、民間企業の創意工夫ある自主的な研究開発投資を促進していく必要がある。</p> <p>しかしながら我が国は、長年主要国中第 1 位であった研究開発投資の対 GDP 比率で平成 21 年度に韓国に抜かれ、主要国中第 2 位であった民間の研究開発投資額でも平成 22 年度に中国に抜かれ、後塵を拝している。また、リーマンショック後、足許における主要国の研究開発投資伸び率を比較すると、我が国の伸び率は他国と比較して最も低く、大きな危機感を持たざるを得ない状況である。</p> <p>特に近年、GAFAM（Google、Amazon、Facebook、Apple、Microsoft）、BATJ（バイドゥ、アリババ、テンセント、JD）、アジア半導体メーカーを中心に、潤沢なキャッシュフローを元手に、莫大な研究開発投資を継続しているが、対照的に日本企業の研究開発投資は伸び悩んでいる。</p> <p>一般的に、研究開発投資は、企業にとっては「今すぐには稼げない」投資であり、その経済効果も後から生まれるものであることから、景気変動等に左右されやすく、短期的に見た場合には優先順位が低くなる。</p> <p>また、研究開発投資は、一企業による投資が経済社会全体に波及し好影響を与える（スピルオーバー効果）いわゆる外部経済性を有するため、社会的に望ましい水準を下回り過小投資となりやすい性質も持つ。そのため、我が国の成長力・国際競争力の源泉となる研究開発活動を適正水準へと促し、さらに加速させるために政府による支援が必要である。</p> <p>革新的なイノベーションがどのような業種・分野・企業形態から生まれてくるかを予測するのは困難であり、業種・分野・企業形態を問わず、幅広く技術・知識の基盤を確立させることが重要であることから、民間企業の研究開発投資に対しては、中立・公平な支援措置として税制措置を講じることが妥当。</p> <p>特に、近年は、第四次産業革命の進展に伴い、デジタル領域を中心に、研究開発が必要な領域は広がり、必要な研究開発投資の量も増大している。デジタル空間における研究開発は、GAFAM 等のデジタルプラットフォームが覇権を握ったが、今後は、製造現場、販売現場等のリアルなデータを個別産業において活用し、社会実装していくことが重要。この領域における競争に勝てるかどうか、日本経済が成長の軌道に乗れるかどうかの分水嶺になる。そのため、新型コロナウイルスの感染拡大による経済停滞により、企業収益が低迷する中であっても、大胆な研究開発投資を行い、リアルデータ・AI を活用してビジネスモデルの転換を図り、DX（デジタルトランスフォーメーション）を強力に推進する企業を後押しすることが重要。</p> <p>しかし、現行の研究開発税制では、一定の控除上限により足下の研究開発投資を増加させることに対するインセンティブが限定的であること、リアルデータ・AI を活用したビジネスモデルの転換に不可欠でありながら、クラウド環境で提供するソフトウェアに係るアルゴリズム構築等の研究開発行為が現行の税制対象になっていない等の制度的課題が存在。我が国企業の競争力を維持・拡充していくため、早急に是正が必要である。</p>
<p>本要望に対応する縮減案</p>	

合理性	政策体系における政策目的の位置付け	8. 科学技術・イノベーション政策の推進 8. 科学技術基本計画の策定・推進
ページ	13—3	

	政策の達成目標	次期「科学技術・イノベーション基本計画」改定作業において精査中。						
	税負担軽減措置等の適用又は延長期間	<p>○クラウドサービスや製品開発のために用いられるツール等、自社利用ソフトウェアに係る試験研究費について、発生時損金処理と研究開発税制の税額控除対象試験研究費への算入</p> <p>○自社を実験場とした研究開発行為に係る規定の明確化（国税庁 Q&A における「事務能率・経営組織の改善に係る費用」の明確化）</p> <p>○オープンイノベーション型の見直し（手続合理化等）</p> <p>（以上、適用期限の定めなし）</p> <p>○総額型及び中小企業技術基盤強化税制の控除上限引上げ</p> <p>○総額型の控除率の上乗措置の適用期限の延長</p> <p>○試験研究費の額が平均売上金額の 10%を超える場合の上乗せ措置</p> <p>○中小企業者等について、試験研究費が 8%超増加した場合に控除率及び控除上限を上乗せする仕組み</p> <p>（以上、令和 3 年 4 月 1 日～令和 5 年 3 月 31 日（2 年間））</p>						
	同上の期間中の達成目標	次期「科学技術・イノベーション基本計画」改定作業において精査中						
	政策目標の達成状況	次期「科学技術・イノベーション基本計画」改定作業において精査中						
有効性	要望の措置の適用見込み	<p>○令和 3 年度適用件数見込み</p> <table border="0"> <tr> <td>・ 総額型</td> <td>3,625 件／事業年度</td> </tr> <tr> <td>・ 中小企業技術基盤強化税制</td> <td>5,489 件／事業年度</td> </tr> <tr> <td>・ オープンイノベーション型</td> <td>596 件／事業年度</td> </tr> </table>	・ 総額型	3,625 件／事業年度	・ 中小企業技術基盤強化税制	5,489 件／事業年度	・ オープンイノベーション型	596 件／事業年度
	・ 総額型	3,625 件／事業年度						
・ 中小企業技術基盤強化税制	5,489 件／事業年度							
・ オープンイノベーション型	596 件／事業年度							
要望の措置の効果見込み （手段としての有効性）	<p>経済波及効果の試算 （総額型、オープンイノベーション型、高水準型）</p> <p>・ 平成 30 年度減税額 5,858 億円 ↓ 研究開発税制による研究開発投資押し上げ効果</p> <p>・ 平成 30 年度～令和 9 年度までの 10 年間に及ぼす</p> <p>①GDP 押し上げ効果：9 兆 2,600 億円 ②雇用創出効果：約 115.9 万人 ③税収効果：約 1 兆 9,012 億円</p> <p>（中小企業技術基盤強化税制）</p> <p>・ 平成 30 年度減収額 357 億円 ↓ 研究開発税制による研究開発投資押し上げ効果</p> <p>・ 平成 30 年度～令和 9 年度までの 10 年間に及ぼす</p> <p>①GDP 押し上げ効果：1 兆 1,930 億円 ②雇用創出効果：約 14.9 万人 ③税収効果：約 2,450 億円</p> <p>（出典：経済産業省「令和元年度産業技術調査事業（研究開発税制の今後の在り方に関する調査）」）</p>							
	ページ	13—4						

相当性	当該要望項目以外の税制上の支援措置	なし																															
	予算上の措置等の要求内容及び金額	政府全体で様々な研究開発予算の要求が行われる予定																															
	上記の予算上の措置等と要望項目との関係	<p>予算上の措置は、それぞれ国の政策に基づき助成等の対象者及び研究テーマ等を設定することで、より特定された分野又は研究開発段階における成果の獲得を目指す制度であり、民間活力による研究開発投資を幅広く、中立的に促進する制度である税制措置とは支援目的と対象が異なる。</p> <p>なお、諸外国においても、民間研究開発投資に対し、予算・税制両面から積極的な支援が行われている中、我が国は予算措置及び税制措置ともに主要国に比べて低水準な状況にある。</p> <p>民間研究開発投資に対する政府支援の対民間研究開発比率（2015）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>研究開発税制</th> <th>補助金等</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>日本</td> <td>4.66%</td> <td>1.17%</td> <td>5.83%</td> </tr> <tr> <td>米国</td> <td>3.56%</td> <td>9.17%</td> <td>12.73%</td> </tr> <tr> <td>英国</td> <td>11.76%</td> <td>9.04%</td> <td>20.80%</td> </tr> <tr> <td>仏国</td> <td>19.35%</td> <td>7.60%</td> <td>26.95%</td> </tr> <tr> <td>韓国</td> <td>5.51%</td> <td>5.20%</td> <td>10.71%</td> </tr> <tr> <td>中国</td> <td>3.78%</td> <td>4.41%</td> <td>8.19%</td> </tr> <tr> <td>6カ国平均</td> <td>4.84%</td> <td>6.10%</td> <td>10.94%</td> </tr> </tbody> </table> <p>（出典：OECD Main Science and Technology Indicators）</p>		研究開発税制	補助金等	合計	日本	4.66%	1.17%	5.83%	米国	3.56%	9.17%	12.73%	英国	11.76%	9.04%	20.80%	仏国	19.35%	7.60%	26.95%	韓国	5.51%	5.20%	10.71%	中国	3.78%	4.41%	8.19%	6カ国平均	4.84%	6.10%
	研究開発税制	補助金等	合計																														
日本	4.66%	1.17%	5.83%																														
米国	3.56%	9.17%	12.73%																														
英国	11.76%	9.04%	20.80%																														
仏国	19.35%	7.60%	26.95%																														
韓国	5.51%	5.20%	10.71%																														
中国	3.78%	4.41%	8.19%																														
6カ国平均	4.84%	6.10%	10.94%																														
要望の措置の妥当性	<p>革新的なイノベーションがどのような業種・分野・企業形態から生まれてくるかを予測するのは困難であり、業種・分野・企業形態を問わず、幅広く技術・知識の基盤を確立させることが重要であることから、民間企業の研究開発投資に対しては、中立・公平な支援措置として税制措置を講じることが妥当。</p> <p>企業は、通常、研究開発等の企業行動により期待される税額控除の大きさを期待収益として取り込んだ上で、投資の可否を判断し、計画を策定する。税制が企業行動へのインセンティブ効果を持つためには予見可能性が必要であるが、新型コロナウイルスの感染拡大による経済低迷により、控除限度超過額が極端に多くなる状況では、研究開発インセンティブが相当程度低下し、税制が所期の政策効果を発揮することが困難になるおそれがある。もちろん、平年度においても一定程度の超過額が発生するものであるが、今回のような超過額の急増は、企業の経営判断の責任のみに帰することができず、企業の投資意欲に与える影響は看過できないものがある。</p> <p>こうした状況に鑑み、収益が悪化する時期の控除可能額の急激な落ち込みを緩和するため、控除上限の引上を時限的に措置することは妥当であると考えられる。</p> <p>なお、諸外国では、研究開発に対する税制優遇措置について控除上限を設定していない国も多い。さらに、諸外国では近年、法人税率を下げつつ、研究開発に対する税制優遇措置を維持・拡充する傾向にある。</p> <p>また、現状の税制では、市場販売ソフトウェアに係る研究開発であれば税制の対象となるが、自社利用ソフトウェアに係る研究開発は税制の支援対象外であり、税制の中立性が損なわれていることから、本要望を通じて税制中立・公平な支援の実現を目指すことは妥当である。</p>																																
ページ	13—5																																

<p>税負担軽減措置等の適用実績</p>	<p>○減収額実績</p> <p><中小企業技術基盤強化税制> 平成28年度 34億円 平成29年度 38億円 平成30年度 46億円</p> <p><オープンイノベーション型> 平成28年度 0.21億円 平成29年度 0.24億円 平成30年度 0.44億円</p> <p>(出典：総務省「地方税における税負担軽減措置等の適用状況等に関する報告書」)</p> <p>【参考：国税】</p> <p>① 減収額実績 (うち、資本金1億円以下の法人分)</p> <p><総額型> 平成28年度 4,939億円 (48億円) 平成29年度 6,102億円 (64億円) 平成30年度 5,751億円 (57億円)</p> <p><中小企業技術基盤強化税制> 平成28年度 260億円 (257億円) 平成29年度 297億円 (296億円) 平成30年度 357億円 (357億円)</p> <p><高水準型> 平成28年度 45億円 (0.8億円) 平成29年度 39億円 (0.8億円) 平成30年度 23億円 (1.2億円)</p> <p><オープンイノベーション型> 平成28年度 42億円 (1.6億円) 平成29年度 81億円 (1.8億円) 平成30年度 84億円 (3.7億円)</p> <p>② 適用事業者数 (うち、資本金1億円以下の法人分)</p> <p><総額型> 平成28年度 3,568法人 (781法人) 平成29年度 4,102法人 (1,186法人) 平成30年度 3,822法人 (1,017法人)</p> <p><中小企業技術基盤強化税制> 平成28年度 5,320法人 (5,302法人) 平成29年度 5,411法人 (5,391法人) 平成30年度 5,690法人 (5,674法人)</p> <p><高水準型> 平成28年度 150法人 (102法人) 平成29年度 147法人 (108法人) 平成30年度 149法人 (110法人)</p> <p><オープンイノベーション型> 平成28年度 397法人 (189法人) 平成29年度 503法人 (234法人) 平成30年度 580法人 (283法人)</p> <p>(出典：財務省「租税特別措置の適用実態調査」)</p> <p>※前回要望時(令和元年度税制改正要望時)における平成29年度、平成30年度の総額型、中小企業技術基盤強化税制の減収見込額及び適用見込事業者数は、別紙に記載。</p>
<p>「地方税における税負担軽減措置等の適用状況等に関する報告書」における適用実績</p>	<p>試験研究を行った場合の法人税額の特別控除(平成30年度)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都道府県民税 1,155,117千円 ・市町村民税 3,501,447千円
<p>ページ</p>	<p>13—6</p>

<p>税負担軽減措置等の適用による効果（手段としての有効性）</p>	<p>○企業の研究開発費の推移（うち、資本金1億円未満の企業分）</p> <p>平成24年度 121,705億円（3,409億円） 平成25年度 126,920億円（3,491億円） 平成26年度 135,864億円（5,141億円） 平成27年度 136,857億円（4,404億円） 平成28年度 133,183億円（4,357億円） 平成29年度 137,989億円（3,955億円） 平成30年度 142,316億円（3,809億円）</p> <p>（出典：総務省「科学技術研究調査」）</p>
<p>前回要望時の達成目標</p>	<p>民間研究開発投資を2020年度までに対GDP比3%以上とする。</p>
<p>前回要望時からの達成度及び目標に達していない場合の理由</p>	<p>平成30年度の民間企業の研究開発投資は、対GDP比2.60%となっている（総務省「科学技術研究調査」）</p>
<p>これまでの要望経緯</p>	<p>昭和42年度 創設 増加した試験研究費の25%税額控除 昭和43年度 拡充 12%を越える増加分…50%税額控除 12%以下増加分…25%税額控除 昭和49年度 縮減 15%を越える増加分…50%税額控除 15%以下増加分…25%税額控除 昭和51年度 縮減 増加した試験研究費の20%税額控除 昭和60年度 拡充 基盤技術研究開発促進税制の創設 中小企業技術基盤強化税制の創設 昭和63年度 拡充 特定株式の取得価額の20%を増加試験研究費として特別加算 平成5年度 拡充 特別試験研究費税額控除制度の創設 （共同試験研究促進税制の創設） 平成6年度 拡充 特別試験研究費税額控除制度の拡充 （国際共同試験研究促進税制の創設） 平成7年度 拡充 特別試験研究費税額控除制度の拡充 （大学との共同試験研究を追加） 平成9年度 拡充 特別試験研究費税額控除制度の拡充 （大学との共同試験研究を行う民間企業が自社内で支出する試験研究費を税額控除の対象に追加） 平成11年度 拡充 比較試験研究費の額を過去5年間の各期の試験研究費の額の多い方から3期分の平均額とし、当期の試験研究費の額を超える場合には、その比較試験研究費の額を超える部分の金額の15%相当額を税額控除する制度へ改組。 特別税額控除限度額を当期の法人税額の12%相当額（特別試験研究の額がある場合には、その支出額の15%相当額を加算することとし、当期の法人税額の14%相当額）に変更。 縮減 基盤技術研究開発促進税制及び事業革新円滑化法の特定事業者に係る特例の廃止。 平成13年度 拡充 特別試験研究費の範囲に研究交流促進法の試験研究機関等に該当する特定独立行政法人との共同試験研究を追加。 縮減 伝統的工芸品産業の振興に関する法律の製造協同組合等が賦課する負担金の廃止。 平成15年度 拡充 試験研究費総額の一定割合の税額控除制度（総額型）の創設。 平成18年度 拡充 試験研究費の増加額に係る税額控除制度の創設。 縮減 税額控除率の2%上乘せ措置の廃止。</p>

これまでの要望経緯	平成 20 年度 拡充	試験研究費の増加額×5%を税額控除する制度（増加型）の創設。 売上高の 10%を超える額×一定比率を税額控除する制度（高水準型）の創設。
	平成 21 年度 拡充	産業技術力強化法の一部改正に伴い、改正後の同法に規定する試験研究独立行政法人と共同して行う試験研究に係る費用及び同法人に委託する試験研究に係る費用を加える。
		拡充 （経済対策）総額型等について①控除上限の引上げ（20%→30%）、②税額控除限度超過額の平成 23、24 年度への繰越控除を措置（22 年度末まで）。
	平成 22 年度 延長	増加型・高水準型の適用期限を 2 年間延長（23 年度末まで）。
	平成 23 年度 縮減	総額型の控除上限を 20%から 30%に引き上げる措置について、適用期限延長せず。
		延長 （平成 23 年 6 月再つなぎ法） 総額型の控除上限を 20%から 30%に引き上げる措置を延長（23 年度末まで）。
	平成 24 年度 延長	増加型・高水準型の適用期限を 2 年間延長（25 年度末まで）。
	平成 25 年度 拡充	総額型の控除上限の引上げ（20%→30%）（26 年度末まで）
	平成 26 年度 拡充	増加型・高水準型の適用期限を 3 年間延長（28 年度末まで） 増加型を、試験研究費の増加割合に応じて控除率が高くなる仕組み（最大 30%まで）に改組。
	平成 27 年度 拡充	総額型と特別試験研究費税額控除制度（OI 型）をあわせ、控除上限を 30%（総額型 25%、OI 型 5%）にするとともに、両制度を適用期限の定めのない措置に改組。 OI 型について、①控除率の引上げ（12%→20%/30%）、②対象費用の拡大（中小企業者等からの知財権の使用料の追加）。
		縮減 繰越控除制度の廃止。
	平成 29 年度 拡充	増加型を廃止した上で、試験研究費の増減率に応じて総額型の控除率が変動する仕組みを導入（控除率の一部は 30 年度末まで）。 売上高試験研究費割合が 10%超の場合、その割合に応じて控除上限を上乗せできる仕組みを導入（30 年度末まで）。 中小企業者等について、試験研究費が 5%超増加した場合に控除率及び控除上限を上乗せする仕組みを導入（30 年度末まで）。 試験研究費の定義を見直し、サービスの開発を支援対象に追加。 OI 型の要件を緩和。
		延長 高水準型の適用期限を 2 年間延長（30 年度末まで）。
	令和 元年度 拡充	特別試験研究費税額控除制度の控除上限引上げ（5%→10%）、支援対象の拡大及び一部控除率の引上げ 総額型の控除率を見直し、増加インセンティブを強化。 高水準型を廃止し、試験研究費割合が 10%超の場合の控除率上乗せ措置を創設（令和 2 年度末まで）。 ベンチャー企業が総額型を利用する場合の控除上限の引上げ。
	延長 控除率及び控除上限の上乗せ措置を 2 年間延長（令和 2 年度末まで）	